

邪馬台国を再考する

明治大学文学部教授 石川 日出志



皆さん、こんにちは。明治大学の石川です。どうぞよろしく願いいたします。

当初は、私ども明治大学の名誉教授、大塚初重先生のご講演という予定でしたが、体調を崩されまして、「石川、おまえが行け」ということでまいりました。しかしながら、なにぶん大塚先生は、日本の考古学界では一二を争う名調子の大塚節で考古学の魅力を語る方です。私はこの秋で60歳になりますが、この業界では若輩者の部類でして、大塚先生には及びもつきません。ご容赦ください。本日は「邪馬台国を再考する」というテーマでお話します。

私は東京で、主に東日本の弥生文化の研究を進めています。学生の時分、福岡に来た折に、夜、福岡の豪傑のような考古学者と飲んでいる際に、一言、言われました。「東京で弥生文化なんか勉強して何になる?!」という、非常に手厳しく批判され、あつけにとられました。でもよかったですね。弥生時代というのは、西高東低、西へ行くほど大陸からの先進的な文化が根付いている。それを勉強するのが、弥生時代研究の本流だという批判です。でも、そのおかげで、東京にいて西日本や九州のことも勉強する意味は何かを考えることができました。

弥生時代を専門とする考古学者の志向・姿勢ってのは非常に面白いんです。九州の考古学者は、足元の九州と大陸側を見る傾向が強い。ただし、東方の畿内との対抗意識もありますので、近畿と西日本一帯も見ています。近畿地方の考古学者は、打倒九州という気持ちがあるから西を見る。邪馬台国所在地論争での九州と畿内の対抗のようなものですね。さらに東方の関東ではどうかというと、東京周辺の南関東は西を向いています。ところが利根川を越えて、茨城・栃木両県方面になると北を向くのです。同じ弥生時代を研究していながら、関東地方で考古学者どうしが背中合わせになっているんです。

そんな遠い東日本から見た西日本、九州、ムナカタをお話しようと思います。皆様方には異論がある部分もあるかもしれませんが、その辺は大きな心で受け止めていただければと思います。

これからのお話は、東日本から見た九州考古学の最近の調査成果の魅力をお話しし、その上で、今日のメインテーマの邪馬台国の問題を考えるということを進めます。

田久松ヶ浦遺跡のインパクト

まずムナカタかいわいですが、最近の調査成果は、私たちの九州の弥生社会のイメージをかなり大きく変えたと思います。

だれもが大きく注目したのは、宗像市の田久松ヶ浦遺跡の調査成果です。今から15年ほど前に調査され、報告されました。弥生時代の開始期の遺跡で、丘陵の尾根筋に十数基の墓が並んでいました。本来は木棺だと思いますが、棺自体は朽ちてなくなっておりました。地面を掘って棺を納める部屋を設けていますが、その壁際に石を積み

上げて、石槨という構造をつくっています。石槨木棺墓です。その構造は、九州で今まで見たこともないような堅固な石積みの埋葬施設で、朝鮮半島の実例に近いものです。そして、その中の幾つかの墓に副葬品として石でできた握りのついた剣（磨製石剣）と長い石鏃（磨製石鏃）がありました。小さな壺は北部九州の弥生土器ですが、その添え方もよく似ています。埋葬施設・副葬品、それに小壺の添え方まで朝鮮半島南部とそっくりでした。これまでも九州で似た例は若干あるのですが、これほど見事ではありません。佐賀県や長崎県方面の西北九州ではなく、まさか福岡市のさらに東のこのムナカタで見つかったのは驚きでした。

今回のシンポジウムのきっかけとなりました田熊石畑遺跡の調査成果も素晴らしいですね。発掘調査の結果、丸太をくり抜いた木棺が調査範囲内に9つあり、そのうち6つを発掘したところ、その全てに青銅の剣や矛・戈という長い柄を付ける青銅の武器が副葬されていました。さらに、その中央及びその脇の埋葬施設では、4～5点の青銅武器がまとまって出土した。この地域に、優位な立場にある有力な一群がおり、さらにその中の2人がずば抜けた特定人物として、たくさんの青銅の武器を保有している。

木棺群はこの発掘範囲の外側にも広がっているようで、木棺群の配置からすると、一辺が15m内外の平面が四角形の低いマウンドを持つお墓があって、そこに十数人の人々が埋葬された状況のようです。ムナカタの地でこうした青銅武器の保有状況が確認されたことは大変な驚きでした。

また、古賀市の馬渡東ヶ浦遺跡で、大きな土器を焼いて棺とした甕棺の中から4点の青銅の武器が集中的に副葬されていたのも大きな驚きでした。

田熊石畑と馬渡東ヶ浦の2遺跡で、ともに青銅武器がまとまって副葬され、その中の特定の人物が多く青銅器を一手に保有する状況は、中期前半段階ではこれまで福岡平野にしか確認されていませんでした。福岡平野から現在の糸島市にかけて、つまり魏志倭人伝という奴国と伊都国と考えられるこの地域こそが弥生時代の北部九州の中で優位な地位にある地域であり、中期前半からやはり突出しているとばかり思っていました。しかし、この田熊石畑、馬渡東ヶ浦の2遺跡は、その東側のこのムナカタ一帯もまた、福岡平野と肩を並べるほどに重要な地域であり、大陸に由来する文物を集中保有しているという非常に注目すべき地域だ、ということを明瞭に示しました。

ムナカタ以外にも佐賀県唐津市の宇木汲田遺跡、佐賀平野の吉野ヶ里遺跡、遠賀川上流域の鎌田原遺跡とか、北部九州各地で一つの遺跡で、複数の埋葬施設から1点ずつ青銅器が出土する事例があります。こうした事例も合わせ考えると、弥生時代中期の前半、紀元前3世紀の後半から2世紀だと思いますが、この時代にはまだ、のちの奴国、伊都国と呼ばれる地域が、北部九州の中で突出した位置にあるのではない。まだ、各地がかなり横並び状態であり、このムナカタかいわいから福岡平野にかけてが、やや優位な立場にある状況だと思います。これまで持っていたイメージを変える必要を強く感じさせる遺跡調査例でした。

福岡平野＝奴国、それから糸島地域＝伊都国、このふたつが北部九州の中で突出した位置を占めるようになるのは、弥生時代中期の後半、紀元前1世紀代になってからです。北部九州の中の地域ごとの関係が、大きく変貌します。

糸島では、江戸時代に、三雲南小路という所から、1つの甕棺に鏡が30面ほど出てくるという事例が見つかりましたし、奴国の領域である春日市の須玖岡本遺跡（D地点）でも同様の事例が明治年間に発見されました。一人の人物にこれほど多数の前漢鏡、しかも大形鏡だけが集中する事例はありませんので、この2つの地域が突出したレベルにあることが分かります。そして、伊都国の領域では、このあと弥生時代後期にかけて井原鍵溝遺跡・平原遺跡と3代にわたる人物が、中国の漢帝国から入手した青銅の鏡を一手に保有しています。

中期の後半、紀元前1世紀の段階になると、奴国、伊都国が北部九州の中で突出した地位を占めると申しましたけれども、それでは、ムナカタ地域の重要性が低下したのでしょうか。私は、そうではなかろうと思います。もちろん、これはのちほどのシンポジウムでご議論いただきたいと思いますが、ムナカタは、伊都国や奴国から見ると東側の隣接地です。この時期は、中国の漢の時代の文物が、北部九州以東にも大量に日本列島にもたらされる段階であることが分かっています。例えば、山口県域ですと、下関市に稗田地蔵堂遺跡という石棺墓から、前漢鏡1面とともに、中国で馬車を用いる際に官人が乗る椅子の上に大きな傘状の覆いを架すのですが、その先端につける塗金製の飾り金具が副葬されていました。また、宇部市の沖ノ山というところからは前漢代のお金が120枚も小さな甕の中から出てきたという事例もあります。

さらに、文物そのものが見つかった訳ではありませんが、銅鐸などの青銅器をつくる地金がそれ以東の地域に中国からかなり大量にもたらされていたことを示す分析データがあります。近畿地方周辺では、弥生時代に「銅鐸」と呼ばれる、内側から打ち鳴らすカネが大量に铸造され使われています。それを铸造するための鋳型も見つかっていますので、確かに、近畿地方周辺で作られていることが分かります。その銅鐸の原料は、銅と錫の合金である青銅ですが5%内外の鉛が混ざっています。鉛同位体比分析という詳しい分析をすると、その原料がこの時期は、中国の黄河中流域からもたらされていることが分かっています。それは、実は九州の北部九州の奴国や伊都国でたくさん出土する前漢鏡と同じ地域からもたらされています。北部九州で製作されるタイプの武器形青銅器も同じ原料を用いています。

つまり、北部九州だけではなくて、山口県域、さらに近畿地方までの西日本一帯に大陸の漢帝国の文物が、黄河流域から、朝鮮半島の付け根の現在の平壤付近にありました楽浪郡という、東の地域への出先機関を經由して大量に持ち込まれている。これは、ムナカタというこの地域を経なければ、到底入手し得ないものです。ムナカタというのは、多くの先生方がお考えのように、やはり、海上交易の実権を握っている地であるというふうと考えられますので、中四国、近畿方面への中国系の文物の流入を考える場合には、このムナカタの地というのは脇に置いておくわけにはいきません。

遺跡からうかがえる当時の様子

次に、『魏志倭人伝』に鮮やかな記述がある国々の様子が、遺跡の発掘によって、かなり見えてきていることに進みましょう。

『魏志倭人伝』では、日本列島に住む倭人の国々が30ほど出てきます。最初に登場するのが対馬国。それから、「一大国」と書いてありますが、これは写本の写し間違いで、「一支国」つまり壹岐国ですね。それから末盧（まつら）国。これは古代の松浦郡域で、現在の唐津市かいわいです。そして伊都国、奴国、それ以外に幾つかありま

すけれども、それらの国の場所が、誰もが合意しているのがこれら5つの国であります。これらの地域についての調査研究が、ずいぶん進んできています。

『魏志倭人伝』はいろいろな読み方ができますが、非常に面白いと思うのは、対馬、壱岐、末盧の三国は、地形環境や生活習俗などの特徴が、国ごとにきちっと描き分けられているリアルな記述になっています。例えば末盧国ですと、「山海に沿うて居る」、つまり海と山が接した所に人々が住んでいる。草木がうっそうと繁っていて、「行くに前人を見ず」。「好んで魚鮓を捕うる」、好んで魚とかアワビなど魚介類を捕えて食べ、海に潜ってこれを採っている。そして、南北に交易をしている、といった具合です。ところが、伊都国ではそうした描写が一切なくなります。伊都国は、「官を爾支と日い、副を泄謨觚・柄渠觚と日。千余戸有り。世王有るも皆女王國に統属す。郡使の往来して常に駐る所なり」とあります。行政面のことしか記述がありません。

対馬国から末盧国までのリアルな地形や生活の描写は、魏の帯方郡——これは現在の平壤周辺からちょっと南辺りの一帯です——からの使者が伊都国までやって来ます。そして、情報収集、あるいは物資を入手して帰って行く。正式な出張でありますので、帯方郡に帰ったら、出張報告書、復命書を提出します。そういった記録がちゃんと魏の側で残されていて、それが圧縮した形で『魏志倭人伝』の中に反映されているのでしょう。

また、逆に伊都国についてはこういう地形・生活の描写がない。「(一) 大率」が置かれるとかの制度的な面や、王がいるとか、帯方郡の使いが常にここまで来るとかは、行政的・外交的なことです。伊都国は、中継地点ではなくて、出張の目的地であるために、書き方が一変するわけです。

これらの各国の様子が発掘調査でずいぶん具体的にわかるようになりました。対馬については近年の調査は少ないので、壱岐国(一大国)から見ていきますと、原の辻遺跡という非常に巨大な村が、継続的な発掘調査をされ、そして、中国の新という国の王莽がつくった貨泉という貨幣や鑄造鉄斧などの大陸系の文物、朝鮮半島の土器だとか多数見つかっており、南北に交易をしているという『魏志倭人伝』の記述をリアルに証明しています。

末盧国にあたる唐津市桜馬場遺跡では、戦争中の昭和19年に、防空壕を掘削した際に甕棺が見つかり、そこから中国・王莽代頃の銅鏡2面が出てまいりました。ところが、防空壕を掘った際に出てきたものですから、鏡だとか腕輪だとかという副葬品の青銅器類は取り上げたものの、それを入れていた甕棺は、打ち砕かれて埋めてしまわれました。この銅鏡は、紀元後1世紀の初めごろのものでしたので、北部九州の弥生時代の暦年代を知る基準とされたのですが、甕棺はスケッチが残されたものの、埋めてしまったために甕棺の特徴がよく分からない。弥生時代の甕棺がいつなのかは、その甕棺の形の特徴を見て決めるのですが、その詳細がそのスケッチではよく分からなくて、なかなか難渋していたのです。ようやく7~8年前でしょうか、もう一度その地点が発掘できることになり、昭和19年に埋められた甕棺が、再調査されて回収することができました。そして、末盧国の中国鏡を出した甕棺が後期前半で、初頭より少し下ることが分かりました。

確かに昭和19年の地点だと確定できたのは、5mmくらいの小さな鏡の破片の発見でした。現在、佐賀県立博物館に展示されていますが、完全な形のように見えて、じつはごく一部を修復している。その抜けた部分にスポッと入ることが分かりましたので、同じ地点だと分かりました。

さらに、鉄刀の握りの部分があり、それには輪っか状の部分がついていました。これは素環頭大刀という漢王朝

特有の大刀で、長さが1mほどになります。こういった中国製の鉄刀や銅鏡を1人の人物が保有し、数千点ものガラス玉も持っています。一人の人物が集中保有しており、末盧国の王墓というにふさわしい墓だと確認されました。さらにその後継のグループも後漢鏡などを保有していることが、唐津平野の中央部に位置する中原遺跡でわかっています。

次に、伊都国に進みますが、伊都国は、邪馬台国問題にかなり密接に絡んできます。

先ほども触れましたが、この伊都国では江戸時代以来、たびたび弥生時代の中・後期の有力者の墓が見つかっておりまして、紀元前1世紀代から紀元後1世紀代、紀元後2世紀、考え方によったら3世紀に下るという方もいらっしゃるかと思いますが、3代にわたる伊都国の王クラスの墓が見つかっております。こういう調査成果は、実は『魏志倭人伝』に、伊都国に「世王有る」、代々王がいるという記述を発掘資料の中から裏付けることができる大変重要な資料です。

糸島平野の中央部に三雲遺跡群という、伊都国の中心となる村があり、その南部に前漢鏡を多数副葬した三雲南小路遺跡や、王莽代頃の銅鏡を多数副葬した井原鎚溝遺跡があります。王莽代から後漢代の銅鏡を多数出土した平原遺跡は、三雲遺跡群の西方の曽根丘陵の北寄りにあります。

糸島平野の北方には志摩半島があります。両者の間は、現在は広い平野になっていますが、当時は中央部の志登遺跡や潤地頭給遺跡がある一帯だけが陸地で、東西から海が迫っている状態でした。この周辺一帯には、この2遺跡の他にも、浦志遺跡や今宿五郎江遺跡、元岡・桑原遺跡群など、海にほど近い遺跡があり、最近、相次いで調査され、大陸系の文物がかなり出ています。また、潤地頭給遺跡ですと、山陰に由来する技術で玉づくりする工房跡も見ついています。西・北方の大陸側、あるいは東方の山陰側とそれぞれ密接に連携する物流の拠点のような遺跡群だということが分かってきました。

これらの遺跡群の調査成果は、非常に重要でして、邪馬台国問題とも関係してきます。『魏志倭人伝』の中に、この伊都国には、一大率、もしくは大率という職がある。それは諸国を檢察する、つまり諸国の動向をチェックする機能を持っている。それはつねに伊都国に置かれている。そして、ここでは倭国の王が魏の都や帯方郡や韓国に使いを出した際、あるいは、帯方郡が倭国に使いを出した場合、いずれも「皆津に臨みて」=港において、「搜露し」=積み荷をあらためて、リストと物品にずれがないかをチェックしているという記述があります。近年のこの一帯の調査成果というのは、この記述を彷彿とさせるものがあると、私は感じています。

こういった大陸とのつながりを示す遺物=文物が、陸続とこれらの国々の遺跡から出てまいります。それは、何も伊都国や壱岐国、松浦国だけではなくて、奴国の地も同様です。例えば、奴国の西部に当たる早良区の西新町遺跡は、砂丘上の遺跡ですが、弥生時代の終わりごろの大集落です。そこでは朝鮮半島系のオンドルや竈をもつ竪穴住居があり、そこから朝鮮半島製の土器が出てくるとか、あるいは朝鮮半島と同じ作り方をしたガラスの玉を作る鋳型が出てくるとか、大陸系のおいがブンブンします。交易の拠点である港町のような遺跡かと思います。

福岡平野でも同様で、海沿いの砂丘地帯に港町のような博多遺跡群があり、その裏(南方)の内陸寄りに入った地区に、この奴国の本拠地である須玖遺跡群や、比恵・那珂遺跡群といった、巨大な村が営まわれていることが分かっています。この比恵・那珂遺跡、須玖遺跡ともにたくさんの調査の蓄積がありまして、鮮やかに、考古学的に奴国を描くということができつつある状態です。それぞれの調査区が狭いので、一見してその規模や内容の

すごさを体感するのは難しいものの、これまでの調査成果を合わせると、南北1～2 kmにも及ぶ大規模な集落遺跡で、各地で青銅器鋳造を行っています。須玖遺跡群の一面では、前漢鏡を多数副葬した須玖岡本遺跡 D 地点という王墓があります。

今日は詳しくは紹介しませんが、これまでの調査データを集約してみますと、やはり弥生時代の後期、紀元後1世紀から3世紀にかけては、奴国と伊都国が、北部九州で突出した地位にあると私には見えます。そして、その1つである伊都国の記事には、「世王有るも皆女王國に統属す」。伊都国に代々王がいるものの、みな女王卑弥呼のもとに統属しているのですから、邪馬台国は、伊都国と奴国より上位の国ということになります。そんな国は九州には考古学的に想定し得ませんので、九州にはないことになる。会場にお出での九州の皆さん、ごめんなさい。でも、考古学的なデータを素直に眺めれば、九州には邪馬台国はないと考えざるを得ないのです。

最近、中国古代史が専門の、早稲田大学の渡邊義浩さんが、『魏志倭人伝』には伊都国に置かれた大率という職が、魏の刺史という職に似るという記述がある。この2文字を見るだけで、九州に邪馬台国はないと断言できる、と言っています。まさかと思われる方は、『魏志倭人伝の謎を解く』（中公新書）をお読みください。刺史という職は、中国では地方に配置されるものであって、首都圏にはない。首都圏に置かれるのは司隸校尉という職だから、というのです。強力なアンチ九州説です。まあ、東京の方ですけれどもね。

邪馬台国はどこにあったのか

邪馬台国は北部九州以外の地にあるということになると、どこなのかということになります。この辺の問題を考えるには、幾つものアプローチがありますが、2つの点を見てみようと思います。第1は広域連携という点です。古墳時代というのは、西日本各地、一部東日本も含めてですが、各地の最有力者である首長が遠隔地どうし、相互に政治的・経済的な連携をする仕組みをつくっています。そういう状況が弥生時代の、いつ頃、どのように始まったかということ。次に第2点目は、この2世紀末から3世紀前半にかけて邪馬台国の時代に、何か大きな社会変動が起きていないかを考古学的に見てみることです。

広域連携については、ここ20数年来の調査でちょっと面白いことが分かってきています。島根県東部の出雲地方では、四角いマウンドを持ち、その四隅が突出する四隅突出形の墳墓が造られています。そのうち最も大規模なのが、出雲市の西谷墳墓群の西谷3号墓です。この地域の最有力首長が亡くなって、墓に埋葬される際に壮大な儀礼が執行されたと思われるのですが、その際に用いられた土器が多数、墓から出てきます。その葬礼用の土器群の中に、吉備（岡山県南部）や丹後、北陸南部の土器があるのです。吉備地域の最有力者層が、自分の葬儀のときに用いる儀礼用の器物が、なぜか出雲から出てくる。同じように丹後や北陸のものも入ってくる。遠隔地の有力首長どうしが葬礼の執行に参画する状況が確認できます。こうした土器類は、最近では出雲平野の集落からも出てきます。

つまり、出雲と岡山、出雲と北近畿・丹後、出雲と北陸という遠隔地どうしが、すでに連携を始めている。これは、2世紀の後半ないし2世紀末だろうと思います。こういう広域連携が、九州でもなく、近畿でもなく、その中間地帯から始まっているのです。

それから、村の組み替え、社会編成を村から見てみようと思います。北部九州の集落遺跡として最近注目されているのが、比恵・那珂遺跡群です。博多駅の南のほうに広がる非常に広大な集落遺跡です。弥生時代早期から連続と続く集落遺跡ですが、弥生時代の後期後半、2世紀のある段階に、村の景観が作り替えられています。東西400～500m、南北1km余りの大集落ですが、その真ん中を南北に貫く道路が造られ、それに軸を合わせるように、建物や区画溝、お墓が整然と配置される。計画的な村づくりですね。奴国の中心的集落のひとつが、大規模に再編されているのです。おそらくは須玖遺跡群も同様なんだろうと推測されますが、九州の他の遺跡でもこういうことがあるのかどうか。

畿内でも、似た動きがございます。比恵・那珂遺跡群のように、それまであった村が、その同じ場所で再編成されるのではなくて、別な場所に、新たにその地域の中心となる村が設計・設営されるという動きです。奈良盆地のど真ん中に、弥生時代の始めからずっと続いてきた唐古・鍵遺跡という村が、弥生時代の終わり、2世紀末～3世紀初めかと思いますが、このころ急速にしぼんでいます。ところが、ちょうどそれと歩調を合わせるかのように、奈良盆地の東の山へり2カ所に新たに計画的な村が出現します。桜井市の纏向遺跡と、天理市の布留遺跡です。ともに、扇状地という、水田をつくるのには不向きな地形の所に、突如大規模なムラが出現するのです。

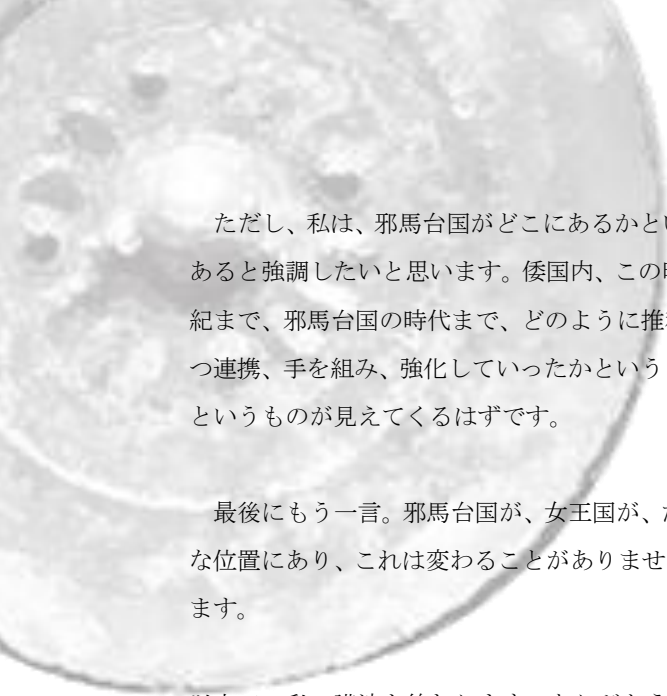
その1つは纏向遺跡で、直径1kmほどの規模の村として造営されています。中央部の発掘調査で、大型の建物が東西に3棟、軸をそろえて配置され、それが塀で囲まれる状況が確認されました。3棟中、西側の1棟はその後の調査で抹消されましたが、この村の中心施設と思われる宗教センター的な機能を持つというふうに考える人もいれば、背伸びして卑弥呼の館だと言う方もいらっしやいます。卑弥呼の館というのは言いすぎでしょうが、ともかく近畿地方ではそれまで見なかった施設があることは確かです。

そして、この纏向遺跡の1帯および周囲には、このあと陸続と前方後円形をした墳墓や前方後円墳がつくられ続けます。

その代表例が、纏向石塚やホケノ山「古墳」です。「古墳」とかぎ括弧付きで表記したのは、古墳と言うべきか否かまだ議論があって決着を見ていないからです。しかし、特定の人物が、全長100m近い、とてつもなく巨大な墳丘を持つお墓を造り、そして中国に由来する銅鏡を多数保有し、そして、前方後円墳という一定の形式を採るようになります。

つまり、2世紀末に纏向という巨大な村が新たに設計され、そして、その有力者たちが前方後円形の新しい墳墓形式を造り、そして、このあと箸墓という全長280mもの巨大な、誰もが古墳と呼ぶような巨大な前方後円墳ができ、そして、それに続く巨大な100mを優に超える古墳が陸続と造営される、大和古墳群が形成されます。この一連の過程が重要です。ここが、邪馬台国かどうかはさておき、畿内を中心とする古墳時代のような社会が、この一連の過程の中で出来上がっていることは、確かなことです。

このようにお話ししますと、石川は邪馬台国畿内説だと、理解されてしまいそうです。僕は畿内の可能性もある、でもまだそこまで絞り込めていない状況にあるという考えです。かつては、僕は、古墳出現期の畿内の土器型式である庄内式土器の形成過程を考えた時、兵庫県西部の播磨も、もう少し重視していいんじゃないか、とも考えました。でも、皆さん方から見れば、石川は畿内説だということになるかもしれません(笑)。



ただし、私は、邪馬台国がどこにあるかという議論はとても重要で、魅力的なんです。それ以前にやるがあると強調したいと思います。倭国内、この時期は倭国なのです。九州を含めて、西日本一帯の各地域が2～3世紀まで、邪馬台国の時代まで、どのように推移してきたか、発展してきたか。そして、どの地域とどの地域が、いつ連携、手を組み、強化していったかということを描くことが大事だと。そこから自然に、倭国の中枢、邪馬台国というものが見えてくるはずですよ。

最後にもう一言。邪馬台国が、女王国が、たとえ万が一、畿内であったとしても、九州は大陸の門戸として重要な位置にあり、これは変わることがありません。それは、古代までの道筋を見れば、鮮やかなことであるかと思えます。

以上で、私の講演を終わります。ありがとうございました。